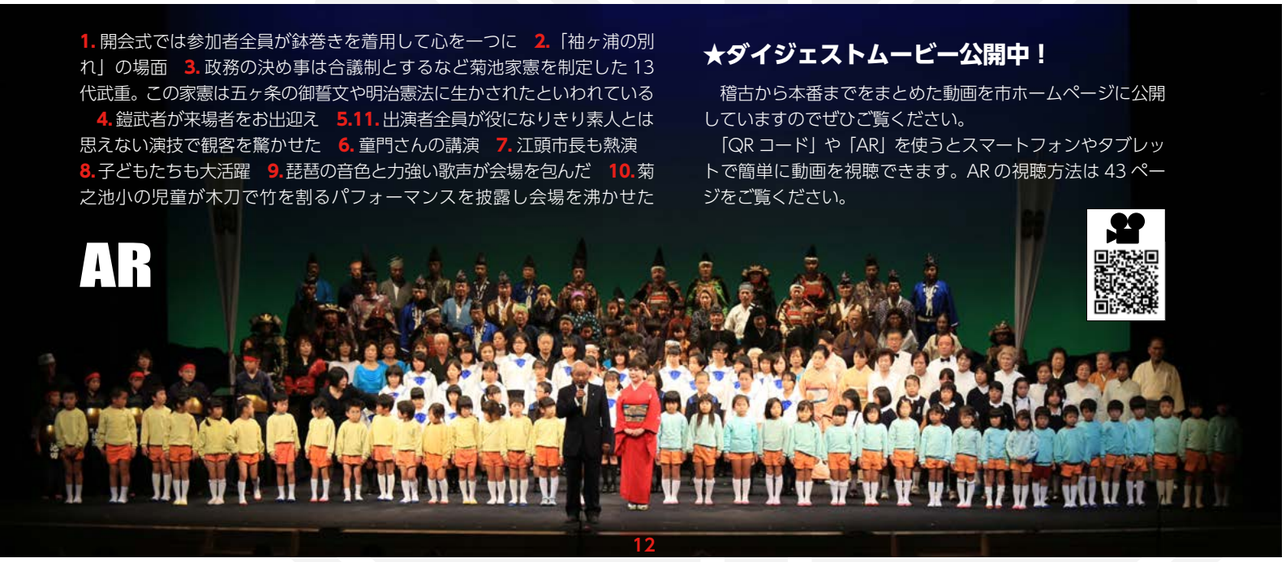
菊池一族の心 今ここに集う

菊池一族歴史交流シンポジウム 平成26年11月29日・30日



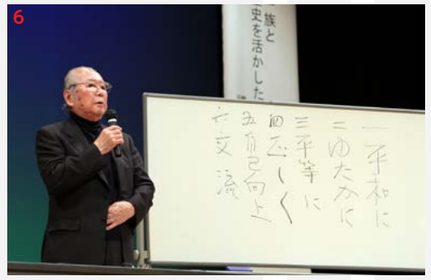
1. 開会式では参加者全員が鉢巻きを着用して心を一つに　2.「袖ヶ浦の別れ」の場面　3. 政務の決め事は合議制とするなど菊池家憲を制定した13代武重。この家憲は五ヶ条の御誓文や明治憲法に生かされたといわれている　4. 鎧武者が来場者をお出迎え　5.11. 出演者全員が役になりきり素人とは思えない演技で観客を驚かせた　6. 童門さんの講演　7. 江頭市長も熱演　8. 子どもたちも大活躍　9. 琵琶の音色と力強い歌声が会場を包んだ　10. 菊之池小の児童が木刀で竹を割るパフォーマンスを披露し会場を沸かせた

★ダイジェストムービー公開中！

稽古から本番までをまとめた動画を市ホームページに公開していますのでぜひご覧ください。

「QRコード」や「AR」を使うとスマートフォンやタブレットで簡単に動画を視聴できます。ARの視聴方法は43ページをご覧ください。

AR



全国の〝菊池一族〟が集結

菊池一族歴史交流シンポジウムが昨年11月29日、菊池市文化会館で開催され、全国から約700人が参加しました。一族の縁から姉妹・友好都市を結んだ宮崎県西米良村、岩手県遠野市、鹿児島県龍郷町と共催。一族の子孫らでつくる「菊池の会」や南北朝ゆかりの地である八女市も参加し、歴史を振り返りながら交流を深めました。

オープニングでは、御松囃子御能保存会の皆さんが、15代武光が懐良親王を迎えたときに始めたとされる「御松囃子御能」（国指定重要無形民俗文化財）を披露。江頭実市長が「皆さんの心に菊池一族の心が刻まれ、絆が一層深まり、相互の明るい未来につながることを願います」とあいさつしました。

作家の童門冬二さんによる基調講演では、一族が思いやりの気持ちである「恕」の精神を大事にしていたことを紹介。「住民や弱い立場の人の声を聴き入れる菊池の精神は、現在のまちづくりにも通じる」と強調しました。

各自治体と団体の代表が登壇したパネルディスカッションでは、一族の歴史と文化について意見を交換。コーディネーターの矢加部和幸さんが、「菊池一族は歴史的にも存在感が大きく、全国的に評価が高い。ただその価値を知る人が少ないのが現状。今後はその価値を全国に発信していくことが大事」とまとめました。

1100人の観客を魅了 市民劇で心を一つに

脚本・演出・出演者、全て菊池市民と出身者で手作りした創作劇「菊池一族物語『蘇れ菊池のこころ』～文教菊池の再興めざして～」が30日、同館でありました。一族の歴史を振り返りながら、文武と礼節を重んじる「菊池精神」を広げようと市民有志が企画。約250人の市民が参加し、およそ3カ月間、稽古に励みました。

劇は全4幕。藤原則隆が菊池へ下向する場面に始まり、12代武時が不利な戦況の下、長男武重に後を託す「袖ヶ浦の別れ」、菊池家憲の制定、15代武光が征西将軍・懐良親王を迎える場面などを上演しました。他にも新菊池音頭や合唱、論語の素読などさまざまな演出で盛り上げ、約1時間半を熱演。最後は出演者全員が舞台に上がり大団円を迎えると、全国から集まった約1100人の観客が惜しみない拍手を送りました。

観客からは「菊池の素晴らしさを改めて感じました。誇りを持って暮らします」「歴史も分かりやすく勉強になりました。感慨無量です」「ふるさとのためにみんなで頑張っていこうという気持ちになれました」といった声がありました。

出演した隈部忠宗さんは、「一族の生き様を身に染みて感じました。稽古を重ねるうちにだんだんとチームワークが良くなっていったのがうれしかったです。こうした取り組みを今後のまちづくりにつなげていくことが大事ですね」と笑顔で語りました。

市民が心を一つに 歴史と誇りを次世代へ

みんなが一丸となって頑張ったおかげで、すばらしい演劇ができたと思います。一人一人の市民が心を一つにすれば、大きなことでも成し遂げられると感じました。

それぞれ仕事や私生活で多忙の中にも関わらず、快く参加してくれました。稽古は大変でしたが、最後まで楽しみながらできたことが成功の秘訣だと思います。会場も入りきれないほど満席でした。感謝の気持ちでいっぱいです。

この市民力を生かし、誇り高い菊池一族の歴史を引き継いでいきたいですね。そうすることでさらにまちづくりが進んでいくと思っています。

菊池市民劇実行委員会
木原昭三 会長

歴代の菊池一族を紹介します

菊池市民広場にある
第15代菊池武光公騎馬像→

菊池氏は南朝方として戦い、北朝方を破り12年間にわたって九州を統治します。

しかし、時代の流れにあらがえず菊池へと戻り、その後は貿易や文化の面に力を注ぎました。戦国時代・下剋上の時代へと移り行く中で、菊池氏は守護職を失い、一族繁栄の歴史は幕を閉じます。

菊池一族は、平安から室町時代後半までの約450年間、熊本を中心に九州で活躍した一族です。源平合戦や元寇など日本史上の有名な戦いにも参加し、蒙古襲来絵詞にはその勇姿が描かれています。

長い歴史の中で最も菊池氏が隆盛を誇ったのは、後醍醐天皇（南朝）と足利尊氏（北朝）が争った南北朝時代です。

初代

菊池則隆（生没年不詳）

1070（延久2）年、太宰府荘官として菊池に赴任したとされ、深川に居を構え、菊池川流域支配の基礎をつくる。深川の佐保川八幡宮や神来の貴船神社勧請のほか、旭志岩本の円通寺の再建も行った。墓所は深川にある。

2代

菊池経隆（生没年不詳）

則隆の子で兵藤警護太郎ともいわれた。1087年～1090年、加恵に諏訪宮と八幡宮を勧請。墓所は出田の若宮神社とされているが、碑などはない。

3代

菊池経頼（生没年不詳）

経隆の長子で、兵藤四郎とも呼ばれた。筑豊に進出して広大な領地を所有していたとされ、後にその領地を鳥羽院に寄進している。墓所は不明。孫に当たる経信は古池城城主である出田氏の祖である。

4代

菊池経宗（生没年不詳）

経頼の長子で、1109（天仁2）年ごろ鳥羽院の武者所として出仕。1113（永久元）年、雪野の八幡宮を勧請している。墓所は不明。

5代

菊池経直（生年不詳～1186）

経宗の長子で、1122（保安3）年、父を継いで鳥羽院の武者所として出仕。1131（天承元）年、菊鹿町の内田八幡宮を勧請した。1186（文治2）年、現在の佐賀県武雄市にて亡くなったとされ、墓所は潮見神社にある。

6代

菊池隆直（生年不詳～1185）

経直の長子。実質的な肥後国司として平氏の九州支配に対抗したが、最後は降伏して平家方になった。家紋を日足紋から並び鷹の羽紋に改めた。墓所は山鹿市の正蓮寺跡にあるとされている。

7代

菊池隆定（1167～1222）

隆直の次男で、長子の隆長が戦死したため跡を継いだ。七坪に産神社、鹿本に米島八幡宮、高橋八幡宮を勧請した。墓所は七城町水次の民家敷地内にあり、兄の隆長、弟の秀直と共に葬られている。

8代

菊池能隆（1201～1258）

隆定の子隆継が早世したため、その子能隆が惣領となった。1221年の承久の乱では、後鳥羽上皇方として幕府（北条氏）と戦ったが敗れた。子には西郷家に入り蒙古襲来のときに活躍した隆政などがいる。墓所は不明。

9代

菊池隆泰（生没年不詳）

能隆の子。父の代に幕府と対抗したため冷遇された。隆泰の子には10代武房のほか、赤星家の祖となった有隆がいる。墓所は不明。

10代

菊池武房（1245～1285）

隆泰の次男。長子は東福寺の住職になった。弟の有隆、叔父の西郷隆政と共に蒙古襲来時に活躍したが幕府からの恩賞が少なく対立していった。菊池神社の境内にある城山神社の主催神として祭られる。墓所は不明。

11代

菊池時隆（1287～1304）

武房の孫。武房の長子である隆盛が早世したため、隆盛の長子である時隆が継ぐことになった。この相続を不服とした叔父の武本と争うことになり、刺し違えて死去したといわれる（病死の説もあり）。墓所は不明。

12代

菊池武時（1292～1333）

武房の孫。鎌倉幕府（北条氏）倒幕を試みるが、周囲の武士団と連携がとれず、子の武重と武光を本拠地へ帰し（袖ヶ浦の別れ）、菊池氏単独で討ち入って敗れた。墓所は福岡市の菊池神社や山鹿市の日輪寺などにある。

13代

菊池武重（1307～1341）

武時の長子。「袖ヶ浦の別れ」の後家督相続。政務に合議制などを採用した菊池家憲を定めた。千の兵で3千の兵を破ったとされる「菊池千本槍」の考案者。菊池神社の主祭神の1柱で、墓所は亘の輪足山東福寺にある。

14代

菊池武士（1321～1401）

武重の弟。北朝方の混乱に乗じ筑後などへの進出を試みたがうまくいかなかった。武光に家督を譲り出家。寺尾野大円寺で「袖ふれし～」の短歌を詠んでいる。墓所は八代市二見、武士が開いた正福寺の裏山の墓地内。

15代

菊池武光（1319～1373）

武重の弟。1348（正平3）年、懐良親王を迎えた。1359年大保原の戦いで勝利し、大宰府に征西府を置き最盛期を迎える。熊耳山正観寺を建立。菊池五山を制定。菊池神社主祭神の1柱。墓所は正観寺の境内にある。

16代

菊池武政（1342～1374）

武光の長子。1367年に肥後守となり同時に家督も継承したと思われる。隈府に本拠地を移した。武光に従いよく戦ったが、武光死去の翌年に死去。墓所は正観寺の境内にある。

17代

菊池武朝（1363～1407）

武政の長子。12歳で家督相続。1375年、台城での水島の戦いをはじめ詫磨原の戦いなどで南朝勢力の盛り返しを図るものの敗退。1392年に南北朝合一となり肥後守護になる。墓所は重味の真徳寺、稗方にある。

18代

菊池兼朝（1383～1444）

武朝の長子。応永の外寇（1419年）で活躍した。1431年、子の持朝に家督を譲り隠居。墓所は七城町岡田の正善寺横にある。亡くなった場所は芦北町の佐敷とされ、そこにも「千寿庵」と呼ばれる墓所がある。

19代

菊池持朝（1409～1446）

兼朝の長子。足利幕府より筑後守護に任じられ勢力の回復に努めたが、一族内の争いなどもあり成就せず死去。墓所は片角の光善寺にある。持朝の子には為邦のほか、22代能運のときに反旗を翻した為光などがいる。

20代

菊池為邦（1430～1488）

持朝の長子。筑後守護として大友氏と領有権を争い敗れる。次男武邦が反乱を起こすなど一族の弱体化が顕在化しはじめる。他方で交易や教養に注力した。墓所は為邦が開いた江月山玉祥寺にある。

21代

菊池重朝（1449～1493）

為邦の長子。応仁の乱に乗じ筑後方面への勢力拡大を図るが弟武邦の反乱などで失敗した。文化・教養の面では孔子堂の建立や、連歌の会（菊池万句）を催すなど尽力。墓所は江月山玉祥寺で為邦の墓と並んでいる。

22代

菊池能運（1482～1504）

重朝の長子。隈部氏など家臣団の離反、20代為邦の弟為光の反乱などで一時は菊池本城を奪われる。奪還したときの傷が元で死去。菊池の直系としてはここで途絶えた。墓所は隈府にある。

23代

菊池政隆（1491～1509）

20代為邦の弟為安の孫。能運の「はとこ」。能運の遺言により家督を継承するが、家臣団の反乱や阿蘇氏などの介入があり、争いに敗れて久米の安国寺で自害した。墓所は泗水町豊水、久米の安国寺の裏にある。

24代

菊池武包（生年不詳～1532）

肥前菊池氏である武澄の後裔。阿蘇惟長（武経）が阿蘇に戻った後、大友重治（義武）が元服するまでの間家督をつなぐため、家臣団などの取り決めによって家督を継承。元服後は重治に家督を譲った。墓所は不明。

※菊池一族の情報はホームページに掲載していますのでぜひご覧ください。→

アドレス：http://www.city.kikuchi.lg.jp